原著

『黄帝明堂灸経不審少々』考

—安土桃山時代の経穴研究の一例として—

天野 陽介

日本大学大学院文学研究科，東京，〒156-0045 世田谷区桜上水3-25-40

On *Koteimeidokyukyo Fushinshosho* : A Look at Early
Acupuncture Point Study in Azuchi-Momoyama Era

Yosuke AMANO

Nihon University, Graduate School of Literature and Social Sciences, 3-25-40 Sakurajyosui, Setagayaku, Tokyo 156-0045,
Japan

Abstract

Here we present research on the *Koteimeidokyukyo Fushinshosho* texts, as part of a study on acupuncture points in the Azuchi-Momoyama Era. The volume of texts is a collection of question and answer letters on acupuncture points between MANASE Dosan and his disciple HATA Soha. The material is significant in understanding the specifics of how acupuncture point study germinated, and then flourished in the Edo Era afterwards.

MANASE Dosan investigated acupuncture points through his bed side practice, and his masters' teachings which referred him to volumes on the art. His research was based on the *Huangdimingtangjiujing* and *Tongrenshuxuezhenjituojing* at first, then mainly on the *Shisijingfahui*. HATA Soha compared these diverse theories on acupuncture points and presented his master Dosan several questions.

Thus here, we take a look at the *Koteimeidokyukyo Fushinshosho* to elucidate acupuncture point study specifics in the Azuchi-Momoyama Era, which hitherto have remained outside our scope of historical research.

Key words : *Koteimeidokyukyo Fushinshosho*, MANASE Dosan, HATA Soha, study of acupuncture points in the Azuchi-Momoyama Era

要旨

今回、安土桃山時代の経穴研究の一例として『黄帝明堂灸経不審少々』を検討した。同書は曲直瀬道三とその門人・秦宗巴との間でやりとりされた経穴に関する問答書簡を録したものであった。同書は、江戸時代以降に活発に行われる経穴研究の萌芽とも言える時期に行われた、経穴研究の実態を残す良質な資料であった。

曲直瀬道三は諸書を参看、また当時最新の経穴学を取り込み、あるいは師説や臨床経験と照らして経穴部位の考訂を行っていた。その研究は『明堂灸経』『銅人腧穴針灸図経』を経て、『十四経發揮』を中心に行うに至っていた。秦宗巴は経穴部位の諸説を比較検討し、師・道三に質問を提示していた。

これまで内容が詳しく検討されていなかった『黄帝明堂灸経不審少々』を取りあげ、未だ詳細が未解明である安土桃山時代の経穴研究の一端を明らかにすることができた。

キーワード：『黄帝明堂灸経不審少々』，曲直瀬道三，秦宗巴，安土桃山時代の経穴研究

緒言

経穴は針灸の施術・診断部位に用いられているが、その運用において経穴部位は基本的要素となることは言を俟たない。しかしながら、医学古典の諸書では経穴部位の表記に相違が見られ、何れの説に従うかはしばしば論議されてきた。経穴部位の研究がどのようになされてきたかを明らかにすることは医学

史的意義はもとより、臨床における経穴運用の幅を拡げる上でも意義があると考えられる。

我が国における経穴および経穴部位の研究は江戸時代以降盛んに行われ、多くの経穴書が編まれた。その初期に著され、以後の経穴研究の先駆けとなった書として、秦宗巴（1550–1607）著『愈穴参伍的法』（天正2年・1574曲直瀬道三奥書）、饗庭東庵

(1621-73) 著『黄帝秘伝経脈發揮』が知られる。秦宗巴は曲直瀬道三の門人、饗庭東庵は曲直瀬玄朔の門人であり、ともに曲直瀬家に従学していることから、経穴研究の初期に曲直瀬家が少なからず影響を与えていたことが推察される。しかし、これらの書が編まれた背景、すなわち当時の経穴研究の実態については十分に明らかにされているとは言い難い。当時の様相を残す資料として、秦宗巴と曲直瀬道三の間で交わされた経穴についての問答を録した『黄帝明堂灸経不審少々』が現存する。従来その存在は報告されていた^(注1)が、内容に関わる検討は未だ報告されていない。

今回、安土桃山時代における経穴研究の実態を残した『黄帝明堂灸経不審少々』を取りあげ、師弟間で交わされた問答を読解考察し、同書の意義を明らかにするとともに当時の経穴研究の一端を調査したので報告する。

対象と方法

『黄帝明堂灸経不審少々』1冊(杏雨書屋所蔵、杏5185)を対象とし、はじめに書誌事項を調査し、次に翻字を行い内容を明らかにした。そして、その結果をもとに考察を加えた。考察には、『兪穴参伍的法』(秦宗巴著、京都大学附属図書館所蔵・ト/93)、『全九集』(曲直瀬道三増補改訂本、北里大学東洋医学総合研究所所蔵・寛永10年刊本・D212/G32、研医会図書館所蔵・古活字本、ほか)、『当流医之源委』(杏雨書屋所蔵・乾5445)、『針灸集要』(曲直瀬道三著、京都大学附属図書館所蔵、シ/508)、『範翁導道伝授書写(支山人より道三に授けし書)』(慶応義塾大学所蔵、150x-9)、『翠竹翁答問書』(京都大学附属図書館所蔵、ス/18)、『新刊黄帝明堂灸経』(国立国会図書館所蔵、WA7-115、慶長古活字印本)などの書を主に用いた。

結果

1. 書誌事項

栄順写、筆写年不詳、一冊。(外寸)幅19.3cm、高29.0cm、7丁、線装。12行、字数不定。無界(但し「一溪先生秘説一紙也」の一部に界線あり)。題簽なし。

首「黄帝明堂灸経不審少々」至5丁裏、次「一溪先生秘説一紙也」至7丁裏。

5丁表に「拝進／盍静老人 留庵宗巴」、7丁表に「天正二壬戌歳 道三」の元奥書あり。7丁裏ノ

ドに「紙数八枚、図一枚、栄順写之」とあり。

本書は当杏雨書屋所蔵本以外の現存は知られていない。

2. 内容

内容を前半部「黄帝明堂灸経不審少々」(1丁表-5丁裏)と後半部「一溪先生秘説一紙也」(5丁裏-7丁裏)に大別し、適宜本文を抄出して記す。

(1) 前半部「黄帝明堂灸経不審少々」

12項目にわたる質問に対し、「雖云」で始まる返答が記されていた。質問は経穴の部位に関わる事項についてであり、『黄帝明堂灸経』の記載を中心に諸書を照合し、それらの諸説の異同を明らかにして、何れの説によるべきかを定めることを目的としていた。以下、各項目について記す([]は筆者補入)。

①天突穴の部位について

質問：「天突一穴、在項結喉下五分中央〔明堂灸経〕。聚英、素問注、聖濟総録等ニハ結喉下四寸。甲乙経、千金方等ニハ結喉下五寸。明堂ノ奥ノ小兒之灸部ニハ結喉下三寸。右之内、何是、何非」。

返答：「雖云、十四経ニハ頸結喉下一寸、云云。唯以三寸宜為準」。

②手三里穴の部位について

質問：「手ノ三里、在曲池下二寸〔明堂灸経〕。銅人、徐氏灸経ニハ三寸。聚英、千金方、聖濟等ニハ二寸ト云。何善哉」。

返答：「雖云、十四経ニハ曲池下二寸、云云。宜従二寸之説」。

③前胸部の経穴の部位について

質問：或中「膺府ノ下一寸」,「或一寸六分」。

返答：「雖云、一寸六分是」

質問：車房「気戸下一寸」,「或一寸六分」。

返答：「雖云、一寸六分是」

質問：中府「雲門下一寸」,「或一寸六分」。

返答：「雖云、十四経ニモ一寸、云云。乳上三肋間ヲ本トスヘシ」。

経穴部位を決めるために用いる計測法について

質問：「意庵常々被申候者、同身之寸法ニ豎横之ニツアリ。豎寸ハ中指中間横文、横寸ハ乳間ヲ八寸定之由申され候き也。今、針灸聚英ヲ見ニ、人身長短之寸尺之人形ニ、靈枢ニモ云、両乳広九寸半ト、云云。師説不同。又、従臚中至神封、横間二寸。従神封至乳中、横間二寸ト

諸書ニ見申てハ、乳間ハ八寸ニ落着候哉。又、徐氏灸經ニ、璇璣与膻府之間三寸ト云。則下從膻中至神封モ又三寸ニ准之、則聚英之九寸説モ大方合申候哉。是又得尊意候」。

返答：「雖云、予受導道之直伝。人身豎横之寸法、嘗授与於意庵畢。以乳間定于横八寸也。以中指第二節之内、定于豎ノ一寸ニ也」。

④經穴部位の寸法表記等についての問答。

質問：「若、絶子ニハ灸臍下二寸三寸間動脈之中三壯〔明堂灸經〕。右、二寸三寸之間トハ、二寸五分ノコト候哉。但又動脈ニ目ヲ付可申候也」。

返答：「雖云、二寸半ノ義也」。

質問：「温溜穴、在腕後五寸六寸ノ間、云云〔明堂灸經〕。是又如何」。

返答：「五寸半也。自余各宜准之」。

⑤病症を治する經穴の部位についての問答。

質問：「正人形第十二日〔明堂灸經〕、華佗療男子卒疝陰卵偏大、取患人足ノ大指、去爪甲五分、内側白肉ノ際、灸三壯、…」の「内側」は「外側たるべく候哉」。

返答：「雖云、檢医林集要疝部之灸治、則第一番出于大敦。然則改内字、宜為外字」。

⑥臑会穴の主治条文についての問答。

質問：「正人形十四〔明堂灸經〕、臑会ノ穴下治德云、主癭及臂氣腫。私曰、臂与氣之中間、痛之一字ヲ加テ見候て可然候也。所以者何、見於聚英、治語云、臑会ノ穴、主癭瘤臂痛氣腫ト云云。但又如何候哉。乍憚、得貴意候」。

返答：「雖云、明堂ニ闕痛一字。以公奇閱、予亦得痛一字。治得ノ読誦流通而佳也」。

⑦「岐骨」と「蔽骨」について、および鳩尾穴の部位についての問答。

質問：「全九中云、蔽骨者、岐骨之岐下、一寸謂之蔽骨、依人或有或无、云云。聚英云、鳩尾穴在臆前蔽骨下五分、人无蔽骨者、從岐骨際下行一寸曰鳩尾、云云。聖濟等之説同。素問之注云、…。鳩尾在臆前蔽骨下同身寸之五分、云云。人无蔽骨者、從岐骨際、下行同身寸之一寸。按甲乙經云、一寸半為鳩尾処、云云。右説、素問、全九ハ蔽骨長一寸ト相聞候。又、英、濟之説ハ、五分ト相聞候。以何為正之乎」。

返答：「蔽骨ノ下五分ハ鳩尾。岐下一寸鳩尾

也」。

⑧前頂穴の部位についての質疑応答。

質問：「正人十八〔明堂灸經〕ニ、前頂一穴、在額会後一寸。聖濟モ同説也。千金方、素問注、聚英ニ曰、額会後一寸半ト、云云。右不同。以何正之」。

返答：「雖云、考十四經云、額会後一寸半ト、云云。自腦戸至額会六穴、各去一寸五分故也」。

⑨大椎穴の部位、および上背部の經穴の部位についての問答。

質問：「背人形第三〔明堂灸經〕曰、大椎在第一椎下陷者中。聚英、千金方、聖濟曰、在第一椎上陷中、云云。徐氏、背部督脈次第之説曰、大杼大骨下、第二陶道、三身柱、云云。素問注曰、大杼在頂第一椎下、兩傍相去各一寸半、云云。私曰、徐氏大杼与大椎作同穴、甚誤歟。大椎者、督脈中行、大杼ハ二行ニシテ各別也。素問氣府篇云、注云、大椎在第一椎上陷中。陶道在項大椎節下間、云云。身柱在第二椎節下間俛而取之。神道在第五節下間、云云。已下如意。右諸書大椎之上ト云、何ソ。…。又素問ノ注ノ陶道身柱次第モ、常ニ承候とハ相違候。果而素問注ヲ可用候哉、否、承之度奉存候」。

返答：「雖云、大椎在第一椎下。陶道在第二椎下。身柱在第三椎下。神道在第五椎下。宜諷類〔切紙〕ニモ次第セリ。所以然、脊椎无穴歌〔切紙〕云、四八十椎並一二ト云ヘハ、四椎ハ无穴愈也。身柱ヲ第二ニスレハ、第三可為无穴歟。不応也。看經類、相伝ヲ專要トナサルヘシト雖、秘説ニ云、大椎ハ大骨与肩齊シキ大骨下、即大椎也。大椎之上小椎三節有之。謂之項骨。或隱、或見、其三椎ニトリアハズ、兩肩ト横ニ齊キ大骨ノ下ヲ大椎ノ穴トハ申也」。

⑩「頂上旋毛中」について、百会穴との関わりについての問答。

質問：「小兒正人形第一〔明堂灸經〕云、灸頂上旋毛中三壯、云云。是ハ百会候哉。小兒生而灸之、防驚風之説者、百会有之事。素問注、百会在前頂後一寸五分、頂中央旋毛中陷者、右頂中旋毛ト斗明堂ニ云テ、寸分ヲ不言ハ旋毛ノ偏頭ニアルモアリ。又、正中ニアルモ御座候。以寸法為正乎。以旋毛為正乎。得尊意候」。

返答：「治德ニ百会トアルヲハ、可抱寸法。

旋毛トアルヲハ不抱寸法」。

- ⑪灸穴(灸に用いる穴、ここでは経穴とほぼ同義)部位には諸説あるが、いかに定めるべきかについての問答。

質問：「灸穴之説者、諸書之内、以何書可為証本哉。但、以数本校正して多分ニ可致落着候哉。承度候」。

返答：「雖云、世ニ普ク人ノ用てヨキ明堂、又ハ世各ノ聞タル者ノ仕候灸法アマタ集テ、宜從甚多者也」。

- ⑫腹部の経穴の部位についての質問。

質問：「腹部寸分諸書之説不同候条、図於一紙進上候。被成御一覽候て是非承度存候」。

天頭書入れに「下一紙之図、別紙ニ見之」とあるも、別紙は付されていない。従って、本質問に対する直接的な返答も未詳である。

- ⑬「奥義之灸説」などがあれば借り受けた旨の所望。

「御抄物之齊下灸経ヲ針灸之眼目と存候へ共、若又其外奥義之灸説、或秘灸共被成御集候一筆御座候はハ、以御愛憐於被借下候者忝可存候」。

- ⑭以上(①-⑬)の項目に対する返答の所望。

「右条之不顧未達申上候事、憚多存候へ共、如此候条、紙面之白地に以朱歟、或藍墨歟、一言之可願御指南候。万端奉仰候。委細前紙ニ申上候」。

- ⑮本書簡の宛名、署名。

「拝進／盡静老人 留庵宗巴」

- ⑯以上(①-⑮)に対する返答の結び。

「雖云、誠ニ奇特御檢閲ニ候。腹部胸部縦横相伝之秘説進候。ヤカテ可^書□□。雖知苦戸主寧固三誠雖憚多灸穴詳弁之御志、深感入候。召御明鑑之楮傍ニ雖カ云ト以墨汚書而已」。

(2) 後半部「一溪先生秘説一紙也」

以下、⑰から⑲までには匡郭および界線が記されている。

- ⑰「一身命名之的所」と題され、身体各部の名称を35条にわたり記す。

- ⑱頭、胸腹の横規(経穴部位を定める横の寸法)について記す。

頭部。「脳前第二行」では曲差穴、五処穴などの部位を挙げ、中行〔正中〕より「一寸五分」と示す。「脳後第二行」では玉枕穴の部位を挙げ、中行より「一寸三分」と示す。「脳

第三行」では本神穴の部位を挙げ、中行より「一寸五分」と示す。

胸腹部。「胸〔腹〕前第二行」では横骨穴から盲兪穴を挙げ、「資生」では中行より「一寸半」、「十四経」では「五分」と示した上で、中行より「一寸半」と示す。ついで商曲穴から幽門穴では中行より「五分」、歩廊穴から^マ或中穴までは中行より「二寸」と示す。「胸腹前第三行」では氣戸穴から乳根穴を挙げ中行より「四寸」、不容穴から滑肉門穴を挙げ中行より「三寸」、天枢穴から帰来穴を挙げ中行より「二寸」と示す。「胸腹第四行」では天溪穴、胸郷穴、周榮穴、中府穴、および衝門穴、府舎穴、腹結穴、大横穴、腹哀穴を挙げ中行より「四寸五分」と示す。

- ⑲奥書

「天正二(壬戌)歳 道三」

- ⑳上記⑱についての補説。

「同身之横寸、先後相違之不審、無余儀候。導道口授之相伝ハ、両間定八寸。其後、滑氏十四経之正面背後之両図ニ、一身豎横寸法、誠の解、如指掌。即、以乳間九寸五分之説、胸围腰围之長、耳前之寸、耳後之寸、参考之、毫里之差違無之候故、以十四経之説、為定規而已。然間、先年加筆之小冊、御見せ候事、本懷大慶不通之候」。

考察

1.『黄帝明堂灸経不審少々』について

本書は曲直瀬道三とその門弟との間でやりとりされた、経穴部位に関わる問答を録した書である。結果⑮からは、本書が留庵宗巴(秦宗巴)と盡静老人(曲直瀬道三)の間で交わされた問答書簡を録したものであることが分かる。結果⑭からは、宗巴が道三に質問書簡を送り、そこに道三からの返答を書入れるよう所望していることが分かる。結果⑯からは、その所望に答えて道三が書入れを行ったことが判明する。

質問者である秦宗巴は『寛政重修諸家譜』によると、丹波国の人、26歳で医を志し、はじめ吉田意庵宗桂に医を学び、その才能を認められ、のち曲直瀬道三に就学、天正15年(1587)より豊臣秀次に仕え、慶長5年(1600)徳川家康に謁見、翌年には采地を賜った、慶長12年(1607)没、58歳。著書には経穴学書『兪穴参伍的法』(未刊)が知られる。同書の京都大学附属図書館所蔵本の末尾近くには天正2年

(1574) 曲直瀬道三識語が録されている^{注2)}。この識語からすると、宗巴は25歳で『兪穴参伍的法』を著しており、その非凡な才能が窺い知れる。

本書の構成は、秦宗巴から道三に提出された質問に道三が返答を書き入れた書簡の写しである前半部分と、後半部分「一溪先生秘説一紙也」に大別される。前半部の末である結果⑩には「腹部胸部縦横相伝之秘説進候」と記されており、これは続く後半部の「一溪先生秘説一紙也」を指すと考えられる。ここから、本書の後半部は前半部の道三返答とともに宗巴に送られたものと考えることができる。そして、後半部の奥書である結果⑨天正2年道三奥書からは、本問答書簡が天正2年あるいはそれ以前に交わされたであろうと考察することができる。また、『兪穴参伍的法』道三識語が天正2年(1574)仲秋であることと、結果⑨の天正2年道三奥書^{注3)}とあわせて推察すると、本問答書簡は天正2年のかなり早い時期に交わされたと考えことができ、あるいは『兪穴参伍的法』編纂の終わりに近い段階で宗巴が疑問点を道三に質問したとも考えられる。

本書の筆写に関わる事項は、7丁裏ノドに記された「紙数八枚、図一枚、栄順写之」のみである。筆写者についての詳細は不明である。

本書に録される問答書簡は、経穴部位に関わる問答であり、その質問は多くは『黄帝明堂灸経^{注4)}』の記載を中心に諸書を照合し、それらの記載の異同を明らかにして提示されている。『黄帝明堂灸経不審少々』なる書名(内題)はここに基づくものと思われる。

2. 秦宗巴の質問について

宗巴による質問では、『黄帝明堂灸経』の記載を中心に質問を提示している(結果①②④⑤⑥⑧⑨⑩)。ほかに宗巴の質問に引用される書目は『黄帝内経素問』(王冰注・新校正注)『黄帝内経靈枢』『黄帝三部針灸甲乙経』『千金方』『銅人腧穴針灸図経』『聖濟総録』『針灸大全』『針灸聚英』『全九集』である^{注5)}。いずれも当時の経穴研究において重要な書と言える。

宗巴が質問に引用する上述の書と、道三が鍼灸において重用していた書との関係を考察すると次のことが分かる。道三が増補改訂した『全九集』の「正面之灸穴」「背後傍側之灸穴」「小児之灸穴」などはほぼ『黄帝明堂灸経』に従い記されており、また道三が京で行った医書講釈の書目が列記される「道三

在洛講釈之記^{注6)}」では、針灸に関わる書として『難経』、『明堂灸経』が挙げられ、道三が経穴講究のテキストとして『黄帝明堂灸経』を用いていたことがこれらより知れる。宗巴が同書を中心に質問を提示していることは、当時の曲直瀬門下における経穴の中心テキストが『黄帝明堂灸経』であったことの証左といえよう。また、『針灸大全』『針灸聚英』『全九集』は道三が著した針灸学書『針灸集要』に多く引用されており^{注7)}、加えて、曲直瀬門下において医学各科の学すべき書を挙げた「源委嗣統之専学^{注8)}」には針灸分野で『銅人腧穴針灸図経』の書名が見える。曲直瀬門下にあった宗巴がこれらの書を講究していたことは想像に難くない。宗巴は、これら曲直瀬門の針灸に関わる記述に積極的に挙げられている書を中心に、諸書を校合して経穴研究を行っていたことが分かる。

宗巴が著した『兪穴参伍的法』には本問答書簡の影響が散見される。例えば、同書における経穴の記載部分は『十四経發揮』に範を取った記述方式であることはその一例であり、また「胸腹四行上下広狭寸分一覧図^{注9)}」や大椎穴、中府穴の記述にもその影響が見て取れる。一方、手三里穴や温溜穴の部位など本問答書簡の道三返答に従わない記述も見られ、また、一部経脈において経穴の記載順が『十四経發揮』や従来の諸説と異なるなど、宗巴独自の経穴研究の跡が見られる。宗巴が編んだ『兪穴参伍的法』は、曲直瀬門で重視された経穴学習書を基本に、本問答書簡で得た知見を加味し、宗巴独自の研究成果に従って編まれた書と位置づけることができる。

3. 曲直瀬道三の返答について

一方、道三の返答で引用される書目は『十四経發揮』『医林集要』『切紙』である。『範翁導道伝授書写』(慶応義塾大学所蔵)によると、道三が師・導道から講授された医書のうち針灸に関わる書には『素問』『難経』『聖恵明堂』(太平聖恵方卷100, あるいはその抄出本^{注10)})がある。道三は『聖恵明堂』を師より学んだ後、上述のように道三増改本『全九集』の経穴部では『黄帝明堂灸経』に多く従い、また『銅人腧穴針灸図経』を門下生の学習すべき書として取りあげた。そして当時最新の経穴学専門書であった『十四経發揮』を重用するに至っている。『十四経發揮』は、永禄6年(1563)以前に道三が著した『針灸集要』には既に引用され^{注11)}、また門流の

者が学ぶべき道三の編著書を記した「当流宜学之目錄^{注12)}」の『針灸集要』の項には「雖知苦齋針灸集要一卷者，是拔集諸聖賢之針灸經并十四經等者也，…」と単独で書名が挙げられている。あるいは「源委嗣続之專学」においても学ぶべき書に掲げられている。そして，本問答書簡では，結果⑩において「同身之横寸，…，以十四經之説，為定規而已」とし，宗巴に「先年加筆之小冊，御見せ候事，本懷大慶不通之候」とするなど，經穴学習，研究において『十四經發揮』を相当重視していることが分かる。

『切紙』は道三により著されたものなので返答に引用されるのはもっともなことであるが，結果⑨からは宗巴がこの時点で切紙「宜諷類^{注13)}」を得ていたことが示唆される。『医林集要』は『針灸集要』の各論部（「諸証の治応穴」）に引用される書目のうち最も多く，また，この各論部の篇目（病門）の立て方はほぼ『医林集要』に従っているなど，道三が針灸臨床において『医林集要』を重用していたことが窺われる^{注14)}。

後半部分の「一溪先生秘説一紙也」（結果⑰⑱⑲）は，その体裁や奥書が付されていることから，道三から宗巴に送られた切紙に類するものと考えられる。しかし，本部分に関わるものは現在知られている刊本『切紙』には見られない。宗巴のように經穴に通曉した者に与えられたものであろうか。本部分を検討した結果，その内容はほぼ全ての条文が『十四經發揮』に拠っていた。道三が經穴部位を定める上で『十四經發揮』を重用していたことがここからも明らかになる。

道三は諸説ある經穴部位の考定を行う上での基本方針を「世ニ普ク人ノ用テヨキ明堂，又ハ世名ノ聞タル者ノ仕候灸法アマタ集テ，宜從甚多者也」（結果⑪）としている。一方で宗巴の質問に対する返答では，多数の医家が採用している説に拠るばかりでなく，師説や臨床的見地に拠ったと思われる返答^{注15)}もあり，文献記述ばかりに拘泥しない姿勢が窺われる。

このようにして經穴，針灸の研究を行っていった道三は，更に天正6年（1578）に『禁灸穴禁針穴解并仰伏同身寸法』一卷，次いで天正10年（1582）に『針治聖法之直伝』一通を編み^{注16)}，これらを門弟教育に用いていた^{注17)}。道三が經穴，針灸の研究を続け，それらに通曉していたことが分かる。

4. 本書の周辺について

道三は門人との間で，本書に録されたような問答書簡をほかにも行っていたようである。『翠竹翁問答書』（慶長7年・1602写，京都大学附属図書館所蔵）では，道三と数名との間で行われた問答書簡が百余丁にわたり録されている。問答の内容は多岐にわたり，患者の現症や経過を示した上での処方との問い合わせが多く見られる。本書は当時の曲直瀬流医学を生々しく残した書であり，曲直瀬流医学の研究において重要な資料となり得る。

国立国会図書館に所蔵される『新刊黄帝明堂灸經』（慶長古活字印本）には多くの書入れがされている。この書入れには，本論で検討した『黄帝明堂灸經不審少々』の記載と同文あるいは類文が多く含まれる。例えば結果①②③④⑧⑨の記載であり，それら書入れは，本問答において『黄帝明堂灸經』の記載と異なる結論を道三が示した場合，あるいは宗巴が諸書を校合して示した質問などである。これらのことから，国会図書館蔵古活字印本『新刊黄帝明堂灸經』は曲直瀬門と少なからぬ関係があると推察される。本書を子細に研究することにより，当時の經穴研究の様相は更に明らかになると期待される。

結論

『黄帝明堂灸經不審少々』の内容を詳細に検討した結果，同書は曲直瀬道三とその門人・秦宗巴との間でやりとりされた經穴に関する問答書簡を録したものであった。本書には，両者が行った經穴研究の実態の一端が残されていた。

曲直瀬道三は「世ニ普ク人ノ用テヨキ明堂，又ハ世名ノ聞タル者ノ仕候灸法アマタ集テ，宜從甚多者也」という方針のもと，諸書を参看，また当時最新の經穴学を取り込み，あるいは師説や臨床的見地と照らして經穴部位の考定を行っていた。その研究は『黄帝明堂灸經』『銅人腧穴針灸図經』を経て，『十四經發揮』を中心に行うに至っていた。

秦宗巴は經穴部位の諸説を比較検討し，師・道三に質問を提示していた。そこで得た回答をふまえ独自の見解を示して『愈穴参伍的法』を編著していた。

本書は，江戸時代以降に活発に行われる經穴研究の萌芽とも言える安土桃山時代に行われた，經穴研究の実態の一端を残す良質な資料であった。

謝辞 本研究を進めるにあたり，ご指導を賜りまし

た日本大学文理学部の館野正美教授に深謝いたします。

利益相反 (COI) に関して開示すべきものなし。

注釈

- 注1) 長野仁. 曲直瀬家医学書覚え書その1. 鍼灸 OSAKA1999; 15(3): 92. 長野仁. 書物からみた日本鍼灸の歴史—内藤記念くすり博物館の鍼灸書—. 鍼のひびき灸のぬくもり—癒しの歴史—, 内藤記念くすり博物館, 岐阜 2002. 44.
- 注2) 本識語は次の通り。「諸家針灸俞穴異同, 参考類伍而一於是非, 欲導後学而撰集此一卷矣。予検閲焉, 誠起死回生之宝也。然而未題書名。就予求之不得点正而以命俞穴参伍的法之六字, 应彼命云。/ 于時天正第二甲戌年中秋望日/ 日東洛下雖知苦戸 道三/ 立庵宗巴公。
- 注3) 原文では天正2年の干支が「壬戌」となっているが, 同年の干支は「甲戌」である。「壬戌」の干支には永禄5年(1562)があるが, 同年では宗巴が若年に過ぎるため, ここでは結果⑬の干支が誤記であると考え。
- 注4) 『黄帝明堂灸経』は, 勅撰の医方集『太平聖恵方』(992年刊)の巻100に録された「明堂灸経」「小児明堂」がのちに単行されたもの。「明堂灸経」の撰者は不明であるが, 『医籍考』『経籍訪古志』は「唐以前の書」としている。「明堂灸経」の内容は尺寸法, 点灸法など灸法に関する記述, 身体各部の経穴の部位と主治症の記述からなり, 「小児明堂」は小児の灸法に関する記述からなる。元代には竇桂芳により『針灸四書』(1311刊)に編入され刊行されている。日本では慶長古活字印行をはじめ幾度も出版され広く流布した。
- 注5) 引用条文の校勘を行った結果, 結果①で引用される『甲乙経』は『素問』気穴論・気府論の王注が引用するもの, 結果②で引用される『銅人』は『針灸資生経』所引のものである可能性があり, 他の引用書もあわせ, 底本についての検討が残される。
- 注6) 杏雨書屋所蔵『当流医之源委』に収録。『当流医之

源委』はその名の通り道三流の源委が示されており, 神農・黄帝から始まり『医学正伝』までの道三流に影響を及ぼした医家・医書が記されている。

注7) 拙稿. 曲直瀬道三の『針灸集要』とその周辺. 生活文化史 2012; 62: 19-43.

注8) 杏雨書屋所蔵『当流医之源委』(前掲注6)に収録。

注9) あるいは, この「胸腹四行上下広狭寸分一覽図」は結果⑫に記される「図」に類するものか。

注10) 龍谷大学図書館写字台文庫に所蔵される『太平聖恵方黄帝明堂灸経』は室町写本と目されている〔真柳誠. 龍谷大学大宮図書館和漢古典籍貴重書解題 (自然科学部). 龍谷大学, 京都. 1997. <http://mayanagi.hum.ibaraki.ac.jp/paper/03/ryukoku/meidoukyukei.html> による〕。その字様などから, あるいは曲直瀬流との関係も考えられる。

注11) 拙稿. 前掲注7。

注12) 杏雨書屋所蔵『当流医之源委』(前掲注6)に収録。

注13) 結果⑨で引用される『切紙』宜諷類〔刊本『切紙』では元亀二年(1571)辛未歳九月下濤奥書〕の「背部中行歌」は, あるいは『針灸大全』背部中行に拠ったか。『針灸大全』は『針灸集要』前半の総論部で最も多く引用される書であり, 道三が『針灸大全』を重用していたことが窺われる。

注14) 拙稿. 前掲注7。『針灸集要』の各論部(「諸証的治応穴」)の用例も, 複数の医書が引用される場合, 『医林集要』があれば第一に挙げ, 次に『全九集』を挙げるといった傾向がある。

注15) 例えば結果④の温溜穴は, 諸説の多くは「小士五寸, 大士六寸」とする(『十四経發揮』は「小士六寸, 大士五寸」に作る)。ちなみに, 同結果④の「絶子」に対する施灸部位については, 『医説』に「灸臍下二寸三分間動脈中三壮」, 『普濟方』に「灸臍下二寸五分動脈中三壮」などとみえる。

注16) 「当流宜学之目録」(前掲注12)による。

注17) 『当流医之源委』(前掲注6)に録される「対学侶宜使授与之次序」による。